

労働者階級のヒロイン、Lizzie Hexam
——*Our Mutual Friend* の経済原理と女性の自立——

中島 剛

序：労働者階級のヒロイン

ディケンズの最後の完成した小説 *Our Mutual Friend* (1865) で、¹ もっとも目立つライトモチーフは以前より指摘されるように、ゴミの浮かぶ汚れたテムズ川と、高く積まれたゴミの山のふたつである。² 共に文明の行き着く先として寓意を持つとともに、富への欲望に支配された社会への皮肉として機能しているが、廃棄物、あるいは川に浮かぶ死体が、金銭に換算される小説世界の状況は、近代の給与制度に慣れた読者の目からみれば、あざといほど、明白で強烈な社会批評である一方、Henry Mayhew の著作にみられるように、当時廃棄物を基にした経済活動の実態が存在したことも事実である。³ その一方でこの小説の細部には、ディケンズがどこまで意識したかは別にして、ところどころに鉄道や大型船舶、電信に代表される、より近代の経済制度の基礎となる要素が散見される。現実、1851年のセンサスの結果を受け、1859年4月に *Edinburgh Review* 誌に Harriet Martineau が寄稿した論文で、彼女は”In the modern sense of 'earning one's bread,' the position arose, for men first, and subsequently for women, after the creation of a middle class of society.” とのべ、また、男性に続いて “Women have been more and more extensively involved in the thing, especially during the last half century....” (30) と、中産階級の成立にともなって女性の労働の機会が増えたことを指摘しているように、より近代的な社会制度への動きが、少しずつであるが、進んでいたことは確かだろう。⁴

この「自分のパンを稼ぐ」という文脈の中で *Our Mutual Friend* に登場する女性、特に Lizzie Hexam の生き方と、彼女の生活、特に労働に関わる部分の関係をみると、興味深いことがわかる。つまり、Little Nell の旅の苦労を描いていた時期のディケンズのヒロインと比較して、Lizzie Hexam のように *Our Mutual Friend* に登場する女性たちは、Bella Wilfer, Jenny Wren (Fanny Cleaver) も含めて、より自立した意志と強い個性を持っているのだが、Lizzie に関していえば、Michael Slater が、”...For all the vigour of her actions...Lizzie is not a character likely to hold the modern reader's interest for her own sake.” (285) と断じるように、その行動力にもかかわらず、その造形のどこかに欠陥があるように思われる。端的にそれがわかるのは、Norman Page が弁護することになった、Lizzie のきれいな話し言葉のありえなさだろう。⁵ Page は “Lizzie...belongs to the class of fairy-tale heroines whose rags and squalid surroundings conceal only temporarily an innate excellence....” (202) として、フェアリーテイルの枠組みで彼女をとらえるべきと主張する。たしかに彼女は労働者階級の人間だが、その生活習慣を正確に持ち合わせる必要は、その意味ではないのかもしれない⁶。

しかし、先に触れたようにこの小説には、当時の英国社会への批判の視点が存在し、その社会は女性の労働を含めて大きな転換期にきていたことも事実であり、実際、Hilary M. Schor は “Lizzie Hexam proves herself as a heroine...in essence, by being a good worker. What she seems to offer ... is a sense of autonomy through labor....” (181) と論じ、また、Alan Dilnot も

“[Lizzie] illustrates the subject of women's independence, which is closely related to her occupations.” (662) として、彼女の「自立」には、現代では個人として自立の重要な基準のひとつである、経済的な意味を内包していることを強く示唆する。結局、一方であくまでも労働者階級であり、Schor らが指摘するようにその階級に意味を持ちながら、実際に労働者のようにみえず、また労働をしている様子がないという、奇妙な自己矛盾に満ちた女性の姿は、富が腐敗を呼び、腐敗が富を代表する *Our Mutual Friend* の世界と、その世界を動かす経済（あるいはそれを象徴する事物）から、「自主的に」距離をおくという意味での自立の結果なのだ。労働とも金銭とも無関係でいながら、自身の、特に、Schor の示唆する 'autonomy' としての精神的な自立を保つという Lizzie のヒロインの構図は、自活のために苦闘するヒロインを描く、19 世紀末以後のリアリズムの小説にありえない。本論文では、このユニークなヒロイン像の理由を *Our Mutual Friend* 全体の経済活動と、それに対する作家の意識に求め、さらには、のちの George Moore 作 *Esther Waters* (1894) 等にみられる労働女性の姿を描くよい機会を得ながら、なぜ ディケンズ はそれを詳しく描かなかったのかを明らかにしていきたい。

I：奪い取る者

Our Mutual Friend のヒロインたちの自立の状況を論じる前に、まずこの小説の世界の経済活動がどういった基準で動いているかを、検証しておく必要がある。後で再び論じるが、導入部で触れたように、*Our Mutual Friend* でディケンズが描く世界には、わずかだが現代の経済の基盤となる交通や通信の制度、あるいは、Bella Wilfer の父のような定期給与を基本にしたホワイトカラーの労働といった、近代の経済制度の基本が散見されるものの、作家の興味はそこにはない。それよりも、先に指摘したふたつのモチーフ、死体の浮かぶテムズ川と、高く積まれた塵芥の山に象徴される富というふたつの 'dust'（キリスト教的な死体のイメージを含めて）の主題が大きく浮き上がる。この世界では、したがって、金銭は数字に換算されるものではなく、手をつかみとるその数や分量によって計量される。言い換えれば、金銭は稼ぐものではなく、奪いとるものなのだ。

他者から奪い取ることにのみにより、自己のための金銭の蓄積を望む典型が、テムズ川で死体などの浮遊物をあさる一人、Roger Riderhood だ。かつての仲間 Jesse 'Gaffer' Hexam が彼を “robbing a man...of robbing a live man” (16) と非難するように、その貪欲さゆえ 'Rogue' Riderhood と揶揄される存在だが、同時に Riderhood は「悪党」でも、初期のディケンズの 'rogue' たちとは違い、その行動にはある一定の原理が働いている事実注目したい。その “a squinting leer” (15)(151) や “crooked eye” (355) といった外見も含めて、獲物を狙う 'bird of prey' のひとりとして、”bloodthirsty” (157) である性質を強調される彼の信条は、単純に “[W]hen a pot of money is going about...get his hand into that pot of money...” (357) という衝動に他ならない。ゆえに、Riderhood は、Book I, Chapter 12 で、報奨金目的に Gaffer Hexam を無実の殺人容疑で Mortimer Lightwood と Eugene Wrayburn に告発し、Book III, Chapter 8 では、瀕死の Betty Higden から “a morsel of money” (502) をかすめとる。Riderhood にとっては、彼女も Gaffer も “a pot of money” (157) にすぎず、”I mean to have it!” (157) と、収奪するその意志に揺らぎはない。こうして、死体のみならず、“a

hang-man air” (158) を漂わせて、「生きた人間」に手をのばす Riderhood の稼ぎは、文字通り “blood-money” (356) となり、その仕事は、かつて John Harmon を亡き者にしようとした George Radfoot と同様、“dark business” (356) なのだ。Riderhood の行動の原理は、Eugene Wrayburn を殺そうとした Bradley Headstone を恐喝するときの言葉、“I want it...and I mean to have it...I want money of you...[e]verythink else!” (776) に集約される。収入を得るという基本的な行為が、他者の身体そのものを収奪する行為に変換される構図がここに存在する。教師として一定の給与を得て生活する Headstone の、“Mine is a poor calling.” (777) という経済状態への合理的な説明は、「猛禽類」の「悪党」 Riderhood には通じない。彼には、ただ相手から奪い取るという手段だけが存在し、それだけが彼の人生の目的なのだ。

Our Mutual Friend のもう一人の悪党 Silas Wegg は、'The Golden Dustman' こと Mr. Boffin に取り入り、のちに恐喝するという行動を通じて、Riderhood とは異なる手段ながら、弱い相手から奪い取るという同じ原理で行動する。本来、粗末な資産しか持たない Wegg の特徴は、“an observant person” (54) “powerful sight of notice” (54)(56) と形容され、Riderhood と共通した動物的な目で “descrying possibility of profit” (56) と利益を手にするその狡猾さであり、対象物を自己の一部にしてみせようとする、権力欲の強さだ。公共の通りの一角を勝手に占有し⁷ 自分と無関係な屋敷に “imaginary power” (53) を行使して “Our House” (53) と呼び続け、流行のバラッドを勝手に流用して売りさばき、お人好しの Mr. Boffin からは “a veal and ham pie” (65) を難なく頂戴する。常に “far-seeing and far-reaching” (294) という性格で、自分が所有できるものを探す機会を逃さない Silas Wegg は、Mr. Boffin から与えられた 'The Bower' では飽き足らず、より多くを求めるが、その物欲の根底には、他者に対する権力の行使への欲望がある。ゆえに、悪霊のように暗やみから、今や金持ちになった Mr. Boffin の一家を眺めるとき、

Power (unless it be the power of intellect or virtue) has ever the greatest attraction for the lower natures; and the mere defiance of the unconscious house-front, with his power to strip the roof off the inhabiting family like a roof of a house of cards, was a treat which had a charm for Silas Wegg. (493)

と、その屋敷を手中にし、自身の思うままに動かすことを夢想するのだ。この権力指向、あるいは “all-powerful” (763) とされる性質ゆえに、Silas Wegg は自身が発見した遺言状を根拠に Mr. Boffin を脅迫し、繰り返し 'Bof-fin' と呼びつけ、さらに “You must be kept under inspection.” (645) と、相手を支配しようとする。結果、Wegg は、“newly-asserted power” (646) を手にし（少なくとも一時はそう思い）、Mr. Boffin に “I am worth my price, and I mean to have it.” (766) と、はっきりと金銭とそれにともなう服従を要求するのだ。

二人の悪党が共通して口にする言葉 'I mean to have it' は、目標に対する強烈な意志の証明として、*Our Mutual Friend* における悪党たちの特徴を表すが、同時に、小説の約5年前に刊行されベストセラーとなった Samuel Smiles の著書 *Self-Help* (1859) に代表される、人生の成功に対する当時の思潮を反映したものだだろう。実際 Smiles は *Self-Help* の中で “The road of human welfare lies along the old highway of steadfast well-doing; and they who are

the most persistent...will usually the most successful.” (90) と主張するが、この「善行」を「強欲」と変えればわかりやすい。Gaffer そして Bradley を餌食にしようとする Riderhood は、“I am a man as gets my living...by the sweat of my brow.” (151) と、何度も「額の汗」に象徴される勤勉を強調し、Mr. Boffin のゴミの山を執拗に監視する Wegg も、“I have a prospect of getting on in life and elevating myself by my own independent exertions.” (88) と「自分独りの努力」を標榜する。Samuel Smiles の *Self-Help* では、繰り返し一つの言葉 'perseverance' が登場するが、「根気強さ」において Riderhood も Wegg も、初期の ディケンズ の小説の Fagin や Quilp といった悪党はもちろん、*Our Mutual Friend* の全ての人物の中でも抜きん出ている。そしてこの小説においては、「根気強さ」は、知性や道徳ではなく、相手を食い尽くすという前述の 'power' の行使へと向けられるのだ。

死体やゴミが資本の象徴とされ、それを手に入れる意志の強さは富を意味する世界では、金銭を手にする行為は Riderhood や Wegg と同じく、相手を利用し食い尽くすことを意味する。それゆえに Wegg が恐喝の共犯として取り込む Mr. Venus も、“I've gone on improving myself in my knowledge of Anatomy, till both by sight and by name I'm perfect.” (89) と、Smiles 式の自己研鑽に励みつつ、死体を加工販売する剥製業者であり、Riderhood が何度も “pardner” (15) と呼ぶ Gaffer Hexam も、“an eager look out” (13) や “a most intent and searching gaze” (13) といった熱心さで死体を探す 'bird of prey' なのだ。⁸ 相手を利用することが当然というこの強力な行動原理ゆえに、Miss Abbey Potterson は “[Gaffer] helps to their deaths a few of those that he finds dead.” (74) という、実際には確かではないことを信用し、Silas Wegg は殺された（とされた）John Harmon の遺産を偶然相続したという理由で、善人の Mr. Boffin について “[I]t cannot be denied that he profits by a murder.” (301) と、殺人で利益を得たと強引に主張できるのだ。ただし重要な点は、お人好しの Mr. Boffin、あるいは、死体の引き上げに失敗して溺死する Gaffer や、カナリアの剥製で少年にお金をごまかされる Mr. Venus は、Riderhood や Wegg の、目的を執拗に追求する意志の強さや狡猾さに関して決定的に劣っていて、Smiles あるいは当時の社会の称揚する「根気強さ＝悪辣さ」において欠けていることなのだ。*Our Mutual Friend* の世界では、この収入や金銭にからむ原理の前では、善人たちはあまりに弱すぎるのだ。

II：ヒロインの選択

強い決意で自己の意思を推し進めることにより、他者の持つ財産や肉体を食い付くという行動原理が、*Our Mutual Friend* の世界を支配している。だが、例えば *Jane Eyre* において Jane が、おじから 2 万ポンドの遺産を相続して “It was a grand boon doubtless, and independence would be glorious...that thought swelled my heart.” (427) と「自立」の喜びを表現する言葉でわかるように、「自立」とは経済的意味を含む以上、*Our Mutual Friend* では、Jane のような自立心を持つ女性でも、遺産相続という「素敵な贈り物」の可能性がないならば、自立を目指すには、他者の持ち物や体そのものすら売買する Riderhood らの経済制度に参加せざるをえない。実際、Roger Riderhood の娘 Pleasant は “[S]he was not of an evil mind or unkindly disposition.” (345) と性格づけられ、さらに “that tenderness of conscience and those feelings of humanity” (351) と、たしかに「良心」と「人間性」を持っているのだ

が、船員相手の下宿屋の経営に関しては “Pleasant Riderhood had it in the blood, or had been trained, to regard seamen within certain limits, as her prey.” (345) と、「獲物」への抜け目なさを持たなければならない。また、他者に対する権力の行使という、Silas Wegg が体現する原則についても同じで、川沿いで酒場を経営する Miss Abbey Potterson は、“It was been hard work to establish order here, and make the Fellowships what it is, and it is daily and nightly hard work to keep it so.” (76) と自身の店 ‘the Fellowships’ の方針をはっきりと Lizzie に伝え、殺人に関与したと噂になった Lizzie の父を店から出入り禁止とする。また人形のドレスを作る娘 Jenny Wren も、毎日 “[p]oorly paid” (223) “pressed for time” (223) と仕事に追われる彼女にとっては、酒を飲んで浪費ばかりする父親に対して “Put down your money this instant.” (241) と “business-like manner” (241) で叱りつけ、仕事もなく無駄に時間を過ごしながら Lizzie を追い掛ける Eugene Wrayburn に対して “[Y]ou had better by half set-up a pen-wiper, and turn industrious, and use it” (237) と、皮肉を言うのも当然なのだ。彼女たちはみんな、守るべき生活があり、そのためには一見冷酷な言動も必要だと理解している。

こういった脇役の女性たちが、その仕事や金銭に対しての敏感さにおいて、Riderhood や Wegg さらには、Mayhew の *London Labour and London Poor* に登場するさまざまな労働者に共通する、強固な意志や抜け目なさを持っている一方、労働者階級のヒロインであるはずの女性 Lizzie Hexam については、その強い意志は金銭や労働とは違った次元において表現される。小説の冒頭においてテムズ川をさらう Gaffer と Lizzie の姿は対照的だ。鋭い視線と感覚を表す “a hungry look” (14) や “a roused bird of prey” (14) が父 Gaffer において強調される一方、仕事に対する嫌悪感を表現する、“very pale” (14) “terrified expostulation” (15) “shivered” (14)(15) といった言葉が、娘 Lizzie の表現に使われる。Gaffer の、川は彼女の “meat and drink” (15) だ、という正しい指摘にみられるような、労働者階級という彼女の本来の設定にもかかわらず、ディッケンズ は Lizzie に具体的な労働のイメージを結びつけることを避け、代わりに何度も作家が過去の作品において描いてきた、Little Nell に代表されるヒロインの自己犠牲の精神を、その労働のイメージのあるべき場所に挿入していく。Book I, Chapter 6 で、Lizzie が弟 Charley を Headstone の学校へ送るための準備をする場面では、

...and she remained there, with a woman's patience and her own purpose. When the morning was well on between four and five, she slipped off her shoes (that her going about, might not wake Charley), trimmed the fire sparingly, put water on to boil, and set the table for breakfast.... Lastly, from her pocket, and from the chimney-piece, and from an inverted basin on the highest shelf, she brought halfpence, a few sixpences, fewer shillings, and fell to laboriously and noiselessly counting them.... (77)

朝食の準備をする Lizzie の姿から、そのまま Charley のための資金を数える姿へと移行することにより、本来ならコインが登場したときに連想していいはずの、それを手にするために汚れた川で労働していた彼女のイメージは消え去り、代わりに、彼女の他者へと奉仕する姿が強調される。そして、ここで消された、悪臭の漂うテムズ川でのつらい労働のイメージは、小説の別の箇所 Book I, Chapter 14 での、溺死した Gaffer Hexam の死体を前

に “for demonstration” と称して Mr. Inspector が丁寧に（1 ページ以上かけて）説明する、冷徹な事故の状況再現の場面へと移されるのだ。

...”and when it was wet, or freezing, or blew cold, he would hang this coil of line round his neck. Last evening he does this. Worse for him! He dodges about in his boat, does this man, till he gets chilled. His hands,” taking up one of them, which dropped like a leaden weight, “get numbed....” (177)

捜査官の言葉によって、テムズ川でのつらい仕事の様子が報告される一方で、Lizzie については、弟 Charley には、“She had been practical enough with him, in suffering and striving for him.” (228) と、父 Gaffer には “a poor girl who used to row poor father on the river” (343) と、彼女の労働は自身のために行なわれたものではない事実が強調されることで、「苦労した」ことも「船を漕いだ」ことも、共に最小限の抽象的な描写におさえられるのだ。

こうしてディケンズは、本来ならば存在すべき Lizzie の姿を、巧みに彼女の言葉や彼女自身の描写から引き離し、別の人物との関連において、より間接的に別の場所で別の形で表現する。小説の冒頭 Book I, Chapter 1 で、テムズ川での仕事が嫌いと言ふ Lizzie に対する父 Gaffer Hexam の叱責の言葉、“As if it wasn't your living!” (15) により、私たちはこの仕事が彼女の「生活」であることを知っても、彼女の住むロンドンのテムズ川の汚水と悪臭の実態については、Book I, Chapter 13 での、彼女の家のそばでアルコールを口にしたときの Eugene Wrayburn の言葉、“Tastes like the wash of the river.... I feel as if I had been half drowned, and swallowing a gallon of it.” (166) と、別の箇所では別の人物によって指摘され、その時 Lizzie 自身は、まるでディケンズが、テムズ川の悪臭について、Lizzie が全く気付いていない（あるいは、気付いてほしくない）かのように、ひとり家の中で “...she was weeping. A sad and solitary spectacle....” (166) と父を待っているのだ。特に小説の最後 Book IV, Chapter The Last での、英国中産階級の代表 Podsnap たちに囲まれながら、Mortimer Lightwood が、友人 Eugene が結婚した相手 Lizzie を弁護して語る言葉は、Riderhood や Wegg が表現するはずの労働、または自立に大きく関わりながら、その実態のみえない自立した労働者のヒロインとしての彼女の特質を表現している。この場面では、英国中産階級 'Society' の価値を代表する Mr. Podsnap は、その場に居合わせた Mortimer に対して、Lizzie は “a female waterman” かと（実際そうなのだが）問いかけるのにし、Mortimer は “Never. But she sometimes rowed in a boat with her father.” (794) と答え、さらに “a factory girl” ではないのか、の問いに対しても “Never. But she had some employment in a paper mill....” (794) と、矛盾した答えを繰り返す。だが、もし親切な Mr. Boffin が同じ質問をしていたならば、Mortimer の答えは、はねつけるような 'Never' ではなかっただろう。つまり、ここで ディケンズ は、Mortimer の否定の答えを、巧妙に Lizzie の労働の事実そのものから引き離し、Podsnap が 'waterman' 'factory girl' と言うとききの軽蔑の感覚への反発に置き換えることにより、実際に彼女がどんな仕事をしていたかという、つらい事実を否定してしまうのだ。

中産階級のメンバーですら “A man may do anything lawful, for money.” (796) と断言する世界で、金銭を稼ぐという生きるための行為が、死体の浮いたテムズ川に代表される原理

がある以上、また、時代の称揚する Smiles 的「根気強さ」が、Riderhood に代表される強欲に象徴される以上、本来、Lizzie の自立・生存は、彼女のつらく、きれいとはいえない労働なしではありえない。しかし、Mortimer の曖昧で相手をはぐらかす返答に代表されるように、Lizzie の労働者としての姿は、常に別のイメージへと転換されてしまう。Book IV, Chapter 6 で、Eugene Wrayburn と Bradley Headstone から逃れ、工場で働く Lizzie が “I live here peacefully and respected, and I am well employed here.” (676) と話すときも、先に引用した Harriet Martineau が同論文で “factory girls of Old and New England” (57) という言い方で米国と英国の女性工場労働者の違いを紹介し、遠回しに “what is repulsive and lamentable here” “yelling and screaming' of the women in the lane” (57) と表現した英国の 'factory girl' の実態ではなく、代わりに強調されるのは、詩的ともいえる、Lizzie を取り囲む田舎の美しい風景なのだ。

So, in the rosy evening, one might watch the ever-widening beauty of the landscape -- beyond the newly-released workers wending home -- beyond the silver river -- beyond the deep green field of corn, so prospering ...beyond the hedge grows and the clumps of trees -- beyond the windmills on the ridge.... (672)

もはや、川の流れもロンドン市内の汚いものではない。その川で、死体ではなく、傷ついた Eugene を水中から救い、看病することで、Mortimer が彼女について、“a brave woman...who has saved his life, with a wonderful energy, and address” (794) と 語るように、最後までその「素晴らしい活力と機敏さ」は、労働（あるいは資本の掠奪）ではなく、他者に仕えることに使われる。労働者であるはずの Lizzie にとって、「勇気ある女性」として自立することは、小説の根底に流れる労働の原理を否定することなのだ。Our Mutual Friend においては、この Riderhood たちの原理から切り離されることにより、ヒロインはヒロインとして成立する。それどころか、ディケンズは、Lizzie がその資質において、英国中産階級の頑迷な価値を代表する Podsnap に対する Twemlow の断固とした言葉、“This lady. What else would you call her...?” (796) によって、Lizzie にはレディと呼ばれる資格があることまで、強くほのめかす。労働の実態は、完全に彼女の奉仕の精神に基づいた性質の裏側に追いやられ、働くことがないゆえにそう呼ばれるはずの呼称、レディを、ついに Lizzie は手にするのだ。しかし、その強引ともいえるヒロインのイメージの転換は、「工場で仕事はしているが、工場労働者じゃない」という自己矛盾を抱えた存在として、Lizzie Hexam のヒロインとしての特殊性を表面化させる結果となったといえるだろう。

結論：

Great Expectations の Pip と Joe の現実味のある生活描写にみられるように、ディケンズは、労働者階級に興味がなかったわけでもなければ、描けなかったわけでもない。しかし、同時に、Hard Times の Rachel のように、物語の中心に女性を据えるとき、作家の関心は、彼女たちの生活や労働の実態ではなく、その愛情や自己犠牲、献身といった資質へと向かう傾向があるのも事実だ。Our Mutual Friend においては、物語はテムズ川での死体

回収という厳しい現実の描写から始まり、Mr. Boffin の塵芥の山というモチーフにおいて資本や労働の現実が強調され、金銭やそれに対する欲望、権利をめぐる現実、Riderhood や Wegg、または彼らに関わった人々―― Mr. Venus, Mr. Boffin, Pleasant Riderhood など――において体現される。だが、そういった労働の現実、ヒロインにおいては献身という資質にかき消されたうえ、Riderhood は Headstone と共に川の中へと沈み、Wegg は恐喝に失敗することで、共にあっさりと追放され、社会の労働の現実を象徴した悪役たちは、勧善懲悪の名のもと、小説の世界から消えてしまう。そのうえ、Mr. Boffin の金銭欲による「墮落」は単なる演技だったと判明したばかりか、小説全体で象徴的な意味をはたしてきた dust の山は消え去り、信じがたいことに、Mrs. Boffin の言葉によれば、腐敗の象徴だったはずの Old Harmon の遺産までが “as if his money had turned bright again, after a long long rust in the dark” (757) と、金色に輝きだすことが暗示されるのだ。

しかし、奪い取り、脅しをかけることによって成立する資本は、悪役とされる人物たちのよって擬人化されうるが、その一方で、本論のはじめに述べたとおり、*Our Mutual Friend* には、もうひとつのより近代的な経済の姿が、電信、鉄道などの言及とともに現れつつある。Harriet Martineau は前述のエッセイの中で、“In the United States, the telegraphing is largely consigned to women; and with it the kindred art of the compositor.” (48) と、電信業務におけるアメリカでの女性の進出を報告しているが、*Our Mutual Friend* でも Lizzie には “a berth in an Electric Telegraph Office, where young women answer very well” (795) が似合うという ‘Society’ の声にみられるように、ディケンズはその新しい女性の職種の存在を意識していることがわかるし、事実、定期的な給与と、定期的な就労に基づく、より近代の労働制度は、Bella Wilfer の父のオフィスワークや、John Harmon/Rocksmith の秘書の仕事にあるように、男性の労働の一部としても作家の視野に入っている。こういった新規の労働実態が、女性の労働の現実を緩和したかどうかは、社会学の大きな課題ともなるので、ここでは追求できないが、明らかなのは、こういう給与制度に基づいた労働の現実に関して、Riderhood や Wegg といった人物の言動で象徴したり、川の死体やゴミの山といった事物に変換したりすることも、または、それらを物語の最後に都合よく消し去ることも、共に不可能だということだ。もちろん、この豊かな想像力、あるいは、社会の制度をある種の神話・寓話と昇華させる技術こそが ディケンズの作家としての本領なのだ。しかし、上まらない給与、変わらない日常が、つらい労働をさらにつらいものにするという女性の人生の状況、それは ディケンズ はかつて描いた *Little Dorrit* の、牢獄で送る Amy Dorrit の人生よりもさらに出口がみえず、絶望的なものだが、その仕事、階級に縛られた女性の労働者の労働を、そのものの終わりのない労働として描くという業績は、のちの自然主義の作家たちにゆだねられなければならないのだ。⁹

注

1. 刊行年度は volume form としての出版を基準にしている。また、本論文における *Our Mutual Friend* からの引用は、すべて Adrian Poole 編集による Penguin Classics 版を基準とし、引用箇所の最後のカッコ内の数字で、ページ数を表すこととする。

2. Arnold Kettle は、すでに 1962 年に John Gross and Gabriel Peason が編集した *Dickens and*

the Twentieth Century の中の “Our Mutual Friend” の部分で “The two most important concrete visual images in *Our Mutual Friend*, as everyone recognizes, are the mounds and the river.” (167) として、「みんなが認める」分析と断言している。なお、上の文章は、“Dickens and Class” と改題され再録された Norman Page (ed), *Hard Times, Great Expectations, and Our Mutual Friend* (London: The Macmillan Press Ltd, 1979) より引用。ただし、一方で Angus Wilson は、“But the dirt-money symbol, by virtue of which it [*Our Mutual Friend*] has crept to the top of the chart in some modern critics' estimation is, I think, too much emphasized by critics....” (281-2) と、その象徴性は批評によって誇張されたものという意見を述べている。

3. 実際の 'dust heap' の様子や、そこでの作業、あるいは 'dustmen' の生活と、その生計の収支については、Henry Mayhew が出版した *London Labour and the London Poor* (1851-2) の中の “Of the Dustmen of London” の項が、現在でももっとも貴重な一次資料だろう。詳しくは Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor* (London: Penguin, 1985), 218-49 を参照。また、ディケンズ主宰の *Household Words* 誌は、1850 年に 'dust heap' に関する記事を掲載している。詳しくは R. H. Horne, “Dust; Or Ugliness Redeemed,” *Household Words* I (13 July 1850), 379-84.

4. 最近では、Anny Sadrin が *Our Mutual Friend* について、“The society depicted in these pages is...very different from that in which Arthur [Clennam] or Pip were placed.... The aristocracy ... had been already for a long time been threatened by the onset of industrial capitalism....” (122-3) と述べている。

5. 例として Kenneth Muir は “Quite unrealistically, even when talking with Jenny Wren, she [Lizzie] apparently speaks Queens's English; and when Eugene falls in love with her, he is very conscious of the difference of class, but not of her speech.” (189) と Lizzie の英語を皮肉っている。

6. あるいは、Lizzie をディケンズ最初の労働者階級のヒロインとして評価する Edmund Wilson のように、“[T]he chief heroine is not Bella Wilfer...but Lizzie Hexam, the illiterate daughter of a Thames-side water-rat. Dickens has here, for the first time in his novels, taken his leading woman from the lowest class; and it will be the principal moral of *Our Mutual Friend* that Wrayburn will have the courage to marry Lizzie.” (65) と、その作家・作品の意図において評価する意見も当然存在する。

7. Henry Mayhew によれば、実際の路上販売の手続きそのものは難しくなかったらしい。“It is customary for a street-seller who wants to 'pitch' in a new locality to solicit the leave of the house keeper, opposite whose premises he desires to place his stall. Such leave obtained, no other is necessary.” (54-5)

8. カニバリズムの視点からディケンズの世界を論じる Harry Stone は、すでに *A Tale of Two Cities* (1859) において、死体が生計の基盤になるというモチーフを *Our Mutual Friend* でのそれと近い形で利用していることを指摘している。“Jerry Cruncher in *A Tale of Two Cities* also earns his (and his family's) mean and bread, as he tells his Distaught wife, by 'fishing' -- the word is his -- fishing in graveyards rather than rivers, but fishing still for corpses and food.” (154)

9. 以下は George Moore の *Esther Waters* の労働者階級のヒロインの生活についての描写

の一部である。

Esther had been constantly in service in many different lodging-houses, many of them of immoral character ... to get her living she had to work from early morning till late at night, scrubbing grates, preparing bacon and eggs, cooking chops and making beds: she was one of the many London girls to whom rest, not to say pleasure, is unknown, and who, if they should sit down for a few moments, hear the mistress's voice, crying: 'Now, Eliza, have you nothing to do, that you are sitting there idle?' (25)

この雇用主の言葉は、終わりのなき仕事に支配された生活のつらさを、的確に表現している。

参考文献

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. London: Penguin, 2003.
- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. London: Penguin, 1997.
- Dilnot, Alan. "Work and Worth in Dickens's Fiction, with Special Reference to *Our Mutual Friend*." *Charles Dickens Critical Assessments*, Vol. III. Ed. Michael Hollington. East Essex: Helm Information Ltd, 1995.
- Kettle, Arnold. "Dickens and Class." *Hard Times, Great Expectations, and Our Mutual Friend*. Ed. Norman Page. London: The Macmillan Press Ltd, 1979.
- Martineau, Harriet. "Female Industry." *Criminals, Idiots, Women & Minors: Victorian Writing by Women on Women*. Ed. Susan Hamilton. Peterborough: Broadview Press, 1995.
- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. London: Penguin, 1985.
- Moore, George. *Esther Waters*. London: J. M. Dent, 1994.
- Muir, Kenneth. "Image and Structure in *Our Mutual Friend*." *Hard Times, Great Expectations, and Our Mutual Friend*. Ed. Norman Page. London: The Macmillan Press Ltd, 1979.
- Page, Norman. "A Language Fit for Heroes." *Hard Times, Great Expectations, and Our Mutual Friend*. Ed. Norman Page. London: The Macmillan Press Ltd, 1979.
- Sadrin, Anny. *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- Schor, Hilary M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1983.
- Smiles, Samuel. *Self-Help*. Oxford: Oxford University Press, 2002.
- Stone, Harry. *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity*. Columbus: Ohio State University Press, 1994.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. New York, The Viking Press, 1970.
- Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow: Seven Studies in Literature*. Athens, Ohio University Press, 1997.

収録紀要

『主流』66号 2005年3月 同志社大学英文学会 pp.19-36